

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選																																
情報処理II	平成24年度	渥美清隆	2	前期	履修単位1	必																																
<p>[授業のねらい] 情報処理Iの講義を踏まえ、プログラミングを通じて情報の利活用ができるようにする。</p>																																						
<p>[授業の内容] 全ての内容が<基礎>の学習目標にも対応する。</p> <table border="0"> <tr> <td>第1週</td> <td>ガイダンス、開発環境の使い方</td> <td>第9週</td> <td>配列</td> </tr> <tr> <td>第2週</td> <td>コンピュータグラフィックス</td> <td>第10週</td> <td>整列法（直接選択法編）</td> </tr> <tr> <td>第3週</td> <td>変数、数値式、入出力</td> <td>第11週</td> <td>整列法（バブルソート編）</td> </tr> <tr> <td>第4週</td> <td>繰り返し</td> <td>第12週</td> <td>表計算ソフトとプログラムの連携</td> </tr> <tr> <td>第5週</td> <td>条件分岐</td> <td>第13週</td> <td>課題プログラミング(設計)</td> </tr> <tr> <td>第6週</td> <td>サブルーチン、第一回小テスト</td> <td>第14週</td> <td>課題プログラミング(制作)</td> </tr> <tr> <td>第7週</td> <td>応用プログラミング</td> <td>第15週</td> <td>課題プログラミング(発表)</td> </tr> <tr> <td>第8週</td> <td>中間試験</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>							第1週	ガイダンス、開発環境の使い方	第9週	配列	第2週	コンピュータグラフィックス	第10週	整列法（直接選択法編）	第3週	変数、数値式、入出力	第11週	整列法（バブルソート編）	第4週	繰り返し	第12週	表計算ソフトとプログラムの連携	第5週	条件分岐	第13週	課題プログラミング(設計)	第6週	サブルーチン、第一回小テスト	第14週	課題プログラミング(制作)	第7週	応用プログラミング	第15週	課題プログラミング(発表)	第8週	中間試験		
第1週	ガイダンス、開発環境の使い方	第9週	配列																																			
第2週	コンピュータグラフィックス	第10週	整列法（直接選択法編）																																			
第3週	変数、数値式、入出力	第11週	整列法（バブルソート編）																																			
第4週	繰り返し	第12週	表計算ソフトとプログラムの連携																																			
第5週	条件分岐	第13週	課題プログラミング(設計)																																			
第6週	サブルーチン、第一回小テスト	第14週	課題プログラミング(制作)																																			
第7週	応用プログラミング	第15週	課題プログラミング(発表)																																			
第8週	中間試験																																					
<table border="0"> <tr> <td> <p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. プログラムは連続実行、条件分岐、繰り返しから成り立っていることを知っている。 2. 複雑なフローチャートからコンピュータの動作を追跡できる。 3. フローチャートからプログラムコードを書くことが出来る。 4. プログラムコードだけでコンピュータの動作を追跡できる。 </td> <td> <ol style="list-style-type: none"> 5. いくつかのアルゴリズムを知っている。 6. 他のソフトウェアと連携させることにより、データ活用が広がることを知っている。 7. 単純なものであれば、自らの考えでフローチャートを描き、プログラムを書くことが出来る。 8. コンピュータ上の動作を人に説明できる。 </td> </tr> </table>							<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. プログラムは連続実行、条件分岐、繰り返しから成り立っていることを知っている。 2. 複雑なフローチャートからコンピュータの動作を追跡できる。 3. フローチャートからプログラムコードを書くことが出来る。 4. プログラムコードだけでコンピュータの動作を追跡できる。 	<ol style="list-style-type: none"> 5. いくつかのアルゴリズムを知っている。 6. 他のソフトウェアと連携させることにより、データ活用が広がることを知っている。 7. 単純なものであれば、自らの考えでフローチャートを描き、プログラムを書くことが出来る。 8. コンピュータ上の動作を人に説明できる。 																														
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. プログラムは連続実行、条件分岐、繰り返しから成り立っていることを知っている。 2. 複雑なフローチャートからコンピュータの動作を追跡できる。 3. フローチャートからプログラムコードを書くことが出来る。 4. プログラムコードだけでコンピュータの動作を追跡できる。 	<ol style="list-style-type: none"> 5. いくつかのアルゴリズムを知っている。 6. 他のソフトウェアと連携させることにより、データ活用が広がることを知っている。 7. 単純なものであれば、自らの考えでフローチャートを描き、プログラムを書くことが出来る。 8. コンピュータ上の動作を人に説明できる。 																																					
<table border="0"> <tr> <td> <p>[この授業の達成目標] 情報処理Iの講義を踏まえ、情報の利活用が出来るようにする。</p> </td> <td> <p>[達成目標の評価方法と基準] 「知識・能力」1～8を中間試験、期末試験、小テスト、発表、宿題で確認する。1～7の重みは90%程度、8の重みは10%程度とする。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルとする。</p> </td> </tr> </table>							<p>[この授業の達成目標] 情報処理Iの講義を踏まえ、情報の利活用が出来るようにする。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準] 「知識・能力」1～8を中間試験、期末試験、小テスト、発表、宿題で確認する。1～7の重みは90%程度、8の重みは10%程度とする。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルとする。</p>																														
<p>[この授業の達成目標] 情報処理Iの講義を踏まえ、情報の利活用が出来るようにする。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準] 「知識・能力」1～8を中間試験、期末試験、小テスト、発表、宿題で確認する。1～7の重みは90%程度、8の重みは10%程度とする。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルとする。</p>																																					
<p>[注意事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本教科は後に学習する「情報処理III」の基礎となる科目である。 ● 特に指示が無い限り、情報処理センター演習室で講義を実施する。 ● オフィスソフトにはOpenOffice.org(libraOffice)を利用する。Microsoft Office 2010も利用を認める。 ● プログラミング言語はprocessing言語とする。 																																						
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 本教科の学習には「情報処理I」の習得が必要である。</p>																																						
<p>[レポート等] 長期休暇中に宿題を課す。定期試験の2週間前を目途に小テストを実施するので、そのための準備もすること。</p>																																						
<p>教科書：特に指定しない。必要な資料は随時配布する。</p>																																						
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 前期中間試験、前期末試験の結果の合計を60%とし、小テスト、発表、宿題などの評価を40%として加重平均し、100点満点換算した結果を学業成績とする。平時の課題の正答率が80%以上であり、再試験を希望する場合のみ再試を実施する。</p> <p>[単位修得要件] 学業成績で60点以上を取得すること。</p>																																						

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
機械工作法	平成24年度	井上哲雄	2	前期	履修単位1	必

<p>[授業のねらい]</p> <p>機械工作法では、金属材料の基礎的特性ならびに鋳造、溶接や各種機械加工の原理、特徴などをまなび、後期開講のものづくり実習へとつなげることを目的とする。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>以下の内容はすべて、学習・教育目標(B)〈専門〉に対応する。</p> <p>(材料の基礎)</p> <p>第1週 機械材料の性質と種類</p> <p>第2週 機械材料の機械的性質と加工法</p> <p>第3週 金属・合金の結晶と塑性変形</p> <p>第4週 簡単な平衡状態図</p> <p>第5週 金属材料の加工性</p> <p>第6週 炭素鋼の性質と分類</p> <p>第7週 炭素鋼組織と熱処理</p> <p>第8週 中間試験</p>	<p>(機械工作法の基礎)</p> <p>第9週 鋳造について</p> <p>第10週 各種鋳造法</p> <p>第11週 溶接と切断について</p> <p>第12週 各種溶接について</p> <p>第13週 塑性加工について</p> <p>第14週 鍛造・プレス加工について</p> <p>第15週 総合演習</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>(金属材料の基礎)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 機械材料の種類と性質について説明できる。 2. 金属材料の機械的性質について説明できる。 3. 金属材料の結晶と変形について説明できる。 4. 簡単な平衡状態図が説明できる。 5. 金属材料の加工性について説明できる。 6. 炭素鋼について説明できる。 	<p>(機械工作法の基礎)</p> <ol style="list-style-type: none"> 7. 鋳造技術の概略が説明できる。 8. 溶接技術について説明できる。 9. 電気・ガス溶接について説明できる。 10. 塑性加工技術について説明できる。 11. プレス加工について説明できる。
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>金属材料の物性に関する基礎的知見を習得するとともに、それらの知見に基づいて機械工作法の種類、用途あるいは特徴を理解できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～11を網羅した問題を中間試験、期末試験で出題し、目標の達成度を評価する。各項目の重みは同じである。中間試験および期末試験の合計点が満点の60%以上を達成した場合に目標の達成とする。</p>
<p>[注意事項] 予習、復習と通常の授業時の演習を重視する。</p> <p>本教科は後に学習するものづくり実習(2年後期)や材料組織学、材料強度学(ともに3年)等と強く関連する教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 中学卒業程度の数学、理科の知識で十分理解できる。新しい考え方(工学的発想)、新しい用語になれることが第一に求められる。</p>	
<p>[レポート等] 授業中に演習問題を解くが、解答をレポートとして提出させる場合もある。</p>	
<p>教科書：新機械工作I 嗟峨常生ら(実教出版)</p> <p>参考書：機械工作便覧など各種機械工作関連著書</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 中間試験および期末試験の平均点で評価する。ただし、中間試験が60点に達していない者には1回の再試験を課し、再試験の成績が中間試験の成績を上回った場合には、60点を上限として中間試験の成績を再試験の成績で置き換えるものとする。期末試験については再試験を行わない。</p> <p>[単位修得要件] 与えられたレポート課題が全て受理され、学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
基礎材料学	平成24年度	江崎尚和	2	通年	履修単位2	必

[授業のねらい]

この授業では高学年で開講される材料工学に関連した専門科目を習得するのに必要な材料の基礎知識の講義をする。はじめて学ぶ材料工学の入門編となる授業である。この授業を通じて、材料とはどのようなものか、材料を学ぶことの重要性、工学分野における材料の役割やおもしろさについて学ぶことを目的とする。

[授業の内容]

材料工学科教育目標(B)＜専門＞に対応

前期

- 第1週 材料の分類法－原子の結合様式の観点からの分類
- 第2週 材料の分類法－用途，状態による分類
- 第3週 材料（金属を中心として）の結晶構造
- 第4週 結晶格子と単位胞
- ミラー指数による結晶の面と方向の表し方
- ミラー指数による結晶の面と方向の表し方（演習）
- 第7週 六方格子の面と方向の表し方
- 第8週 中間試験
- 第9週 立方晶におけるミラー指数間の関係
- 第10週 格子定数と格子面間隔
- 第11週 X線回折－X線の基礎
- 第12週 X線回折－X線の回折現象
- 第13週 実際の結晶におけるX線の回折
- 第14週 結晶の格子面間隔，格子定数の求め方
- 第15週 X線を用いた結晶構造解析の演習

後期

- 第16週 合金の構造－置換型固溶体と規則格子
- 第17週 合金の構造－侵入型固溶体と結晶のすきま
- 第18週 鋼における炭素原子の役割とマルテンサイト変態
- 第19週 合金の成分割合の表し方
- 第20週 材料の変形と構造－応力ひずみ曲線
- 第21週 材料の変形と構造－ホール・ペッチの関係
- 第22週 材料の変形と構造－単結晶のすべり変形
- 第23週 中間試験
- 第24週 材料の変形と構造－刃状転位とらせん転位
- 第25週 材料の変形に関するビデオ鑑賞
- 第26週 結晶の成長
- 第27週 合金の平衡状態図－全率固溶型
- 第28週 合金の平衡状態図－相律および天秤の法則
- 第29週 共晶型および包晶型状態図
- 第30週 鉄－炭素系状態図

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
基礎材料学（つづき）	平成24年度	江崎尚和	2	通年	履修単位2	必

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>材料工学科教育目標(B)〈専門〉に対応</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 原子の結合様式、用途、状態によって材料の分類できる。 2. 純金属の代表的な結晶構造の名称と原子配置が描ける。 3. 立方晶について、格子定数から原子間距離（原子半径）または原子半径から格子定数が計算で求められる。 4. ミラー指数を用いて結晶の面と方向が示せること、また、与えられたミラー指数から面と方向が描ける。 5. 立方晶におけるミラー指数間の関係を理解している。 6. 立方晶の格子面間隔がミラー指数と格子定数から計算できる。 7. X線の発生原理が説明できる。 8. 結晶によるX線の回折現象が説明でき、ブラッグの条件式が導き出せる。 9. X線回折パターンから結晶の格子面間隔、その結晶が体心立方晶が面心立方晶かの判定、格子定数の計算、回折ピークのミラー指数による指数づけができる。 	<ol style="list-style-type: none"> 10. 置換型固溶体、侵入型固溶体について説明できる。 11. 結晶格子の隙間の種類と位置や大きさが説明できる。 12. 鋼を焼き入れすると硬くなる理由が説明できる。 13. 合金の濃度を質量％、モル％で表記できそれらどうしの換算ができる。 13. 軟鋼の応力-歪曲線が描け、各主要部分の名称が記述できる。 14. 結晶の変形の様式と変形機構について説明できる。 15. 転位と結晶の変形におけるその役割が説明できる。 16. 合金状態図の基本を理解している。 17. 状態図から合金の冷却曲線を描き、その凝固過程が説明できる。 18. 鉄-炭素系状態図が描け、各主要部の名称が記述できる。
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>種々の材料の分類（有機材料・無機材料・金属材料）ができ、それらを構成している原子の集まり方、結晶構造について基礎的な特徴を理解するとともに、それら原子の配列の仕方を知る基本的な手法、原子が規則正しく並んだことによって生じる物理的現象や機械的性質の変化等を理解するほか、材料を構成元素を変えることによる材料の状態や性質の変化などが理解できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>[この授業で習得する「知識・能力」]1～18の習得の度合を中間試験、期末試験、必要に応じて演習レポート等により評価する。各項目の重みは同じである。試験問題とレポート課題のレベルは、100点法により60点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように設定する。</p>
<p>[注意事項] 前期末までかけて、材料の構造の基礎を中心に説明する。特に結晶の面や方向を表わすミラー指数は十分に理解すること。以後の授業では、結晶面、方向はすべてそれらの表示方法を使って授業を進める。教科書は使わずに配布資料を用いるので予習の必要はないが、復習はしっかりやること。本教科は後に学習する材料組織学の基礎となる教科である</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 結晶の構造においては3次元空間での結晶の広がりを取り扱うので、3次元座標、基礎的な立体幾何学、特に三角関数は十分理解しておくこと。本教科は、材料工学序論の学習が基礎となる教科である。</p>	
<p>[レポート等] 授業内容についてより理解を深めるため、できるだけ多くの課題演習を授業に取り入れる。</p>	
<p>教科書：ノート講義（プリント資料）</p> <p>参考書：「金属結晶の物理」宮原将平著（アグネ） 「放射線の金属学への応用」辛島誠一著（日本金属学会） 「鉄鋼材料学」 門間改三著（実教出版）</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>求められたすべてのレポートの提出をしていなければならない。中間・期末の2回の試験の平均点を80％、課題を20％で評価する。ただし、中間試験で60点に達しなかったものについては再試験を行い、60点を上限として再試験の成績で置き換えるものとする。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
設計製図 II	平成 2 4 年度	黒田大介	2	前期	履修単位 1	必

[授業のねらい] 品物を製作する上で図面は必要不可欠なものであり、技術者となるために機械製図を学ぶということは必須のことである。本講義では、本格的な機械製図の基礎を確実に習得することが目標である。

<p>[授業の内容] 学習・教育目標専門に相当する</p> <p>第1週 図面の様式、線の種類および図形の表し方の説明</p> <p>第2週 寸歩記入および断面図の説明</p> <p>第3週 寸法記入の留意事項の説明</p> <p>第4週 練習ノート</p> <p>第5週 練習ノート</p> <p>第6週 練習ノート</p> <p>第7週 練習ノート</p> <p>第8週 中間試験</p> <p>第9週 軸受けふたの製図</p> <p>第10週 軸受けふたの製図および検図</p> <p>第11週 支持台の製図</p> <p>第12週 支持台の製図および検図</p> <p>第13週 軸受けの製図</p> <p>第14週 軸受けの製図</p> <p>第15週 軸受けの製図および検図</p>	
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 図面に用いる線と文字の書き方を理解している。</p> <p>2. 製図用具の使い方を理解している。</p> <p>3. 断面図の書き方を理解している。</p>	<p>4. 寸法記入法を理解している。</p> <p>5. 簡単な形状の部品の製図法を理解している。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>製図用具の使い方、図面に用いる線・文字、立体的な図示法および投影図の書き方等機械製図の基礎を理解し、図示の工夫や寸法記入を理解し、簡単な部品の製作図作成に活用できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>「知識・能力」の1～5の確認を、提出された図面、後期中間試験および学年末試験で行う。達成度評価における各「知識・能力」の重みは概ね均等とし、評価結果が百点満点の60%の得点で、目標の達成を確認する。</p>
<p>[注意事項] 後期中間までに展開図、および製作図における線の用法と図の配置について講義する。後期末までに図示の工夫、および寸法記入について講義する。また、全ての講義において演習を中心に行い、出来るだけ多くの図面を製図する。なお、本科目は材料工学科において開講される設計製図Ⅲ、設計製図Ⅳおよび設計製図Ⅴの基礎となる科目である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] より実践的な製図方法や知識を修得する科目であるため、本科目の受講には材料工学科第1学年で開講された設計製図Ⅰにおいて学習・修得した製図に関する基礎的な知識・技術が必要である。</p>	
<p>[レポート等] 各授業における演習課題の提出を行う。</p>	
<p>教科書：「機械製図」 津村利光、徳丸芳男著（実教出版）、基礎製図練習ノート（実教出版）</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 演習課題と提出図面を60%、中間試験と期末試験を40%として評価し、最終成績とする。評価が60点に満たない場合には、新たに演習課題を課し、60点を上限に再評価することもある。</p> <p>【注意】 未提出の課題および図面がある場合、学年末評価を59点以下とする。</p> <p>[単位修得要件] 学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
ものづくり実習	平成 24 年度	幸後 健	2	後期	履修単位 2	必

<p>[授業のねらい]</p> <p>材料技術者には様々な部品、部材を自ら加工、製作する工作技術が求められる。「ものづくり実習」では前半部では1年生で習得した機械工作法の知識を基礎として、工具および工作機械を実際に使用したいいくつかの材料加工プロセスの習得と工作技術の向上を目指す切削、研削、溶接などの基本的な作業を自ら行えるようにするのが目的である。後半部では、1 夏季休業中課題としたサイエンスクエストについて、データ精査化や内容の高度化を各担当教員が指導する。材料工学科教育目標(B)〈基礎〉〈専門〉に対応。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>第1週 安全教育ガイダンス 第2週～第6はクラス全体を5グループに分け、各グループが下記5つの実習テーマについて各1週(铸造に関しては2週)の実習を行う。</p> <p>・実習テーマ①手仕上げ、②機械仕上げ、③旋盤、④铸造(型作り及び铸込み)、⑤溶接</p>	<p>第7週～第12週はクラス全体を5グループに分け⑥サイエンスクエスト課題の竹とんぼの作製を試みる。前半と後半に分け、前半3週では仕様書に沿った竹とんぼづくり(作成2週、評価1週)を実施する。その後、グループごとに任意のコンセプトに基づき(高く飛ぶ、長く滞空する、デザイン重視、ブーメランのように戻る等)改めて2週(作成1週、評価1週)を行い、目標を達成する諸能力との関係を考慮させる。最終的にポスターにまとめ、成果を発表する。(担当は前期ものづくり実習で実施したメンバー)</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>①手仕上げ：ノギスを中心とした測定の基本操作とバリ取りなどの手仕上げの基礎ができる。</p> <p>②機械仕上げ：シェーパー(形削盤)およびフライス盤の基本操作を体得するとともに、機械工作で使用するブロックの切削加工プロセスができる。</p> <p>③旋盤：旋盤の基本操作を体得するとともに、簡単な設計図を基にして文鎖を製作できる</p>	<p>④铸造：砂型の作製、原料溶解、铸込みなどの铸造工程を理解できる。</p> <p>⑤溶接：ガス溶接、アーク溶接などの設備の取り扱い方法と基本的な溶接ができる。</p> <p>⑥：自らの設定した課題に対して論理的思考によって解決法を見つけて実験することができる。また、得られた結果を元に自らの発想や考察についてポスターなどを用いて発表することができる</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>課題を設定し、論理的思考に基づいた解決法を見出して実行することができる。さらに、発表することでより高度な自己表現力を得ることができる。穴あけ、ねじ立て、切削、研削、铸造、溶接などに使用する工具、工作機械、設備の基本構造、専門用語を理解し、工作に必要な基本技術および専門知識を習得し、目的とする部品、部材を作製し、作製工程を報告することができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>「知識・能力」①～⑥の実習テーマに関する「知識・能力」を、実習ノートの内容および工作物の仕上がり、サイエンスクエストの報告により評価する。評価に対する「知識・能力」の各項目は①～⑤の合計で50点、⑥で50点分とし。満点の60%の得点で、目標の達成を確認する。</p>
<p>[注意事項]</p> <p>第1回目については、安全教育ガイダンスを実施する。実習を行うにあたり指定の作業服、安全靴、安全メガネ、安全帽の着用を義務付ける。重大な怪我や障害を負う危険性の高い作業が多くあるため、実習を受けるにあたっては厳格な規律、真摯な態度、整理整頓を厳守すること。毎回実習報告書を作成し、作業内容等の詳細をレポート形式にて実習報告書に取りまとめて実習終了毎に報告する。実習報告書および報告事項に不備がある場合には再提出を求める。本科目は後の材料工学実験や卒業研究と強く関連する。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>本科目には1年生で学習した機械工作法や材料工学実験の技術や知識を基礎とする。座学で習得した知識を実習により発展的に体得することが必要となる。</p>	
<p>[レポート等]</p> <p>毎回の実習後、実習報告書を記入して提出する。</p>	
<p>教科書：特に使用しない 参考書：「新機械工作法1」、「新機械工作法2」吉川昌範ら著(実教出版)</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] サイエンスクエストの成果報告を50%(50点)実習報告書の内容を50%(50点)として評価する。報告書の未提出分がある場合には、学年末評価を59点以下とする。</p>	
<p>[単位修得要件] 与えられた実習テーマの報告書を全て提出し、学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
材料工学実験	平成24年度	小林達正, 万谷義和,	2	前期	履修単位 1	必

<p>[授業のねらい]</p> <p>現在, 世の中で実用されている各種の材料(先端材料を含め)を取り上げ, ものづくり・体験型の基礎的な実験を通じてそれら材料の特性やそれが現れるメカニズム, 合成方法や加工処理方法などを学ぶ。また, 同時に材料のおもしろさや魅力を体験し, これから学ぶ材料工学に関連した専門教科への学習意欲の向上のきっかけとすることを目的とする。</p>	
<p>[授業の内容] 全ての内容は材料工学科教育目標(B)<基礎><専門>に対応</p> <p>材料に関連する以下のテーマをについて実験・実習を行う。 クラスを4つのグループに分け, 各テーマにつき1週～3週にかけて行う</p>	<p>第1, 2週 安全講習, 各テーマの説明 第3～15週</p> <p>(1) ミクロの世界(単レンズ顕微鏡の作製と観察) (2) 燃料電池 (3) 鉄粉カイロ・金属の熱伝導・分光器 (4) 形状記憶合金・結晶モデル・ピューター</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>① 顕微鏡の構造を理解するとともにいくつかの物質のミクロ組織を理解している。 ② 燃料電池の原理を理解している。 ③ 鉄粉カイロおよび感光性樹脂の特性を理解している。 金属の熱伝導性の相違を理解している。</p>	<p>④ 形状記憶合金の形状記憶処理方法と動作を理解できる。 結晶の原子配列を理解できる。 金属の熔融現象を体験するとともに熔融金属の成型方法を理解している。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>材料評価に多用される各種顕微鏡の特徴を知り, 燃料電池の原理を理解し, 材料の特性やそれが現れるメカニズム, 合成方法や加工処理方法などについての基礎知識を習得し, それらを報告できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>①～④の実験に関する「知識・能力」を, 報告書の内容により評価する。評価に対する①～④の各テーマの重みは同じである。満点の60%で, 目標の達成を確認する。</p>
<p>[注意事項]</p> <p>実験開始前のガイダンスを行うので説明をよく聞くとともに, 事前に実験指針をよく読み, 必ず内容を理解した上で実験に臨むこと, また, 熱, 電気, 薬品等による危険を伴う作業をするので, 安全には十分注意すること。必ず作業服を着用するとともに, 必要に応じて安全眼鏡をかけること。この科目は, 後に学ぶ3年～5年の材料工学実験の基礎となるものである。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>物理, 化学等ですでに履修した基礎知識。また, 本教科は1年次の材料工学実験と強く関連している。</p>	
<p>[レポート等]</p> <p>テーマごとに実験報告ノート記入して提出する。</p> <p>教科書: 特に使用しない。テーマごとにテキストを配布する。</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 実習毎のレポートの内容を100%(100点)として評価する。 [単位修得要件] 与えられた実習テーマのレポートを全て提出し, 学業成績で60点以上を取得すること。</p>	